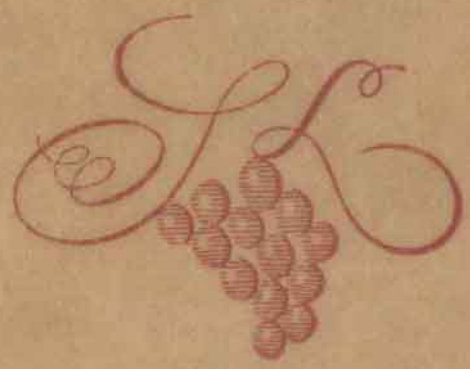
新潮文庫

旅路

大佛次郎著



新潮社

旅　路

定価200円

新潮文庫 草83C

昭和三十年六月三十日 発行
昭和四十四年七月二十日 二十四刷改版

著者 大佛次郎
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京二六〇局一一一一(大代)
振替東京八〇八番

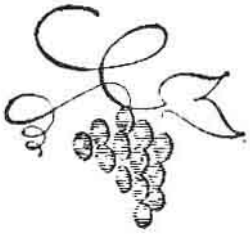
乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

㊗ 印刷・光邦印刷株式会社 製本・大進堂製本所
© Jirō Osaragi 1955 Printed in Japan

新潮文庫

旅路

大佛次郎著



新潮社版

862

旅

路

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

木の間

電車は北鎌倉の駅を出て、古い杉の森の間を通り、両側に迫った低い山ふところに寺らしい屋根や静かな住宅の聚落を覗かせて走り初めていた。次が自分の降りる鎌倉なので、岡本妙子は立ち上って手を伸して、網棚に置いてあった花束を取った。花はセロファン紙で柔かくくるんであった。白いのと濃い紫色との鉄線の花だったので、その色が薄い紙質をすかして、ぼかしたように見える。

日曜日の鎌倉駅は、人で混雑していた。歩廊を埋めるようにして外へ押出されて行く人波の渦から脱け出ると、妙子は近くにあって一度寄ったことのある喫茶店の方に広場を横切って行った。

心覚えだけで、さがして行ったのが、木の扉を閉めてある入口を見つけて、入ってから、

「お宅、電話、御座いましたわね？」

電話器は、すぐ近くの板壁に寄せた小さい卓の上に在った。光の眩しい戸外を歩いて来て、店の中が暗かったせいもあるが、あまり側にあって気がつかなかったのが極り悪かった。

電話帳を見て、妙子は、叔父の岡本素六の家の番号を確かめた。

卓にもたれながら、耳にあてた受話器の中で、信号のベルが遠く鳴っているのを聴いていた。

春の真昼らしいだるい気持であった。目の前に置いてある硝子のケエスの中に、化粧した洋菓子や、レモンの実が並べてある。レモンの実が新しくつやつやとして、美しい。

「信号してもお出になりませんが」

と、交換手が知らせて来た。

「そう？」

ちょっと眉根を寄せたが、

「では、もう少し経って、もう一度、呼んで下さらない？」

珈琲を貰って、壁の画の額など眺めながら待った。

十年近く前に叔母が死に、叔父の素六は、今度は、ひとり子の明を戦争中、南支でなくしてから、孤独の身の上に成ったが、家事の世話をしている雇い女がいるので、誰れかが電話に出る筈であった。広い家だったが、電話は勝手に近い廊下に在った。

もう一度受話器を取り上げた。また信号のベルが繰返して鳴るのを聴き、叔父の家が深閑としているのが想像出来た。やはり誰れも出ない、と言われた。

「そんな筈ないのよ。故障なのかしら？」

思わず、こう言うと、交換手は、急に気短い調子の返事になった。

「信号は鳴ってて、お出にならないんです」

叔父の家には明の墓のある寺から後で廻ることにしてある。駅附近らしく人で賑っている町筋から離れると、踏切りを渡って、樹木が多く、垣根も生垣や竹を編んだものが多い住宅地を寺に向った。

いつ来ても気がつくことだったが、鎌倉は見物に来る人たちで大通りが埃っぽく賑っているのと反対に、裏通りは稀れにしか人に出逢わないくらいに閑静なものであった。どの往来の行く手にも樹木の繁った山が見えているのも、東京から来た者には羨しい。

境内に人の気配もない寺の門を見て、墓地にはいると、一層静かだった。竹藪だの寮風の住宅の裏手に、小高い台地に在るのだが、山がすぐ目の前に迫る感じで、土地で谷戸と呼んでいる山の崖に挟まれた狭い場所に墓石が並んである。山裾の崖をくりぬいた石窟が、幾つも並んで、それが一々、人の墓となっているのも、よその土地に例のないことであろう。樹々が日蔭を作っているから、石に苔が多く、冬の落葉がまた深い。

人は他に誰れもいないものと期待して歩いて来て、妙子は、従兄の墓に人の影が動いているのを見つけた。(ああ、叔父さん、明さんのお墓に来ていらしった)

晩春の風のない午後で、墓地の木々は鎮まり返り、雀らしい小鳥の声が枝の間から聞えているだけである。従兄の墓で動いているひとは、脇目もふらない様子で竹箒で地面をはいている。近寄って見ると、横顔が若く、叔父の素六ではなかった。上着も帽子も脱いで、肱までまくったワイシャツから太い腕が出ている。

叔父に頼まれて掃除に来ているものと見た。

「叔父さま、いらっしゃる?」

青年は、驚いたように振向いて妙子を見つめてから、

「誰れのこと?」

と、口走って、

「僕は知りませんよ」
妙子が途方に暮れたように黙り込んでいると、青年はまた箒を動かし初めて、落葉をかき寄せながら、
「たいへんな木の葉だ」
と、ひとりごととも妙子に聞かせるともなく言った。
「鎌倉のコートにテニスに来たから、ちょっと寄って見たんですよ」
締木(しめぎ)をかけたラケットが、上着や帽子の下に生垣の上に伏せてあるのに気がついたし、ひき緊(しま)った顔立であった。
「明さんのお友達？」
妙子は、自分も掃除を手伝おうと身支度しながら、こう尋ねて見た。
「ええ、学校の……。が、死んでしまったら、つまらない」
と、青年は言った。
「戦争だったから仕様がないけれど、メエ（明）の奴ア、自分で買って他人より危険な場所へ出たのに違いないと思うんですよ、学校時分も、そんな気性でしたからね。惜しいことをした」
「水、御座いません？」
落葉をはらった地面の草をむしっていた青年は、かがんだ姿勢のまま振向いて、
「井戸がその先に在ったかな？」
「見て来ますわ」
墓地の間を戻って行くと、露天の古い井戸があった。そう深くなかったが、つるべは歪(ゆが)んだバ

ケツに縄を結んだものである。水を掬み取る手桶も、タガがはじけていて用をなさないので、つるべのバケツのまま運ぶことに成った。

青年は煙草を口にくわえて立っていたが、

「君は、死んだ岡本の何なんです？」

「いとこ」

と、短く答えてから、妙子は、もう少し丁寧に名乗ることにした。

「岡本妙子です」

「メエに妹はなかったと思った」

と、青年は微笑してから、

「メエが僕のことを話したかどうか知らない。予科から学校を出るまでメエと一緒だった津川です。郷里は和歌山なんだけれど、学校に通う間、鎌倉にいたので、メエと仲善かったんです」

「あたし、まだ子供でしたわ。それに、その時分はまだ京都の家にいたものですから、明さんとも、極く、たまにしかお会いしなかったんです」

漂よう煙草の煙の中で、津川は若い語気に力をこめた。

「死なしたくなかった」

「叔父を御存じ？」

「そうだな。二度か三度、見た程度かなあ、いや、往来を歩いているのを見かけたことは、いくらでもある。メエの家へ行ってオヤジさんを見たのは、そんなものでしょう。三、四度かしら」

こう答えてから、付加えた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ほんとうのことを言うと、おっかなかった。若い僕らから話すこともなかったし見つかると、叱られそうに見えた」

「そんなでもないんですわ」

花生けに水をそそぎ、バケツに残ったのは、墓石を濡らすように静かに掛けて行った。何の為にそうするのか知らなかったが、お墓にまいる時はそうするものだと、どこかで覚えていたようである。石は三年ほど前に建てたものでまだ新しかった。水に濡れた部分は、心持、青い色に変って来る。

妙子は持って来た花束をほどき、花生けに分けて差すのに余念なかった。

津川が後から尋いた。

「何の花です？」

「鉄線、きれいでしょう？」

「花なんて、まともに見たこともない。むろん、買ったこともない」

と、津川は、くつろいだ心を感じさせた。

「縁がないのだから、名前も、いくつ知っているか疑問だ。テッセン？　聞いたこともない。変な名ですね」

「鉄の線って書くんです。茎が細くて針金のようにかたいせいでしょうか？　私の京都の家の庭にあって、いつも今時分になると、咲きました。もっと薄い色のもあるんですけれど、この濃い紫と、白いのがきれいなんです」

「メエだって、花の名は、あまり知らなかったろうと思うな。花屋へ行って買ってとどけるよう

な相手も、まだなかった。僕も、今日、メエの墓へ行ってやろうと思って家を出て、花を持って来るなんてことは、気がつかなかった。僕は、メエの為にちゃんと、ほかのものを準備して来たんです」

「お線香？」

「そんな、陰気なものじゃない」

生垣の下に置いてあったズックのボストンバッグをあけ、汗で濡れたシャツなど詰めてあったのを、かき廻して、底の方から津川が出して見せたのは、ポケット入りのウィスキイの小瓶である。

「瓶は安ものだが、中味は生一本て言うんですか、ちゃんとした日本酒なんだ。学校もテニスも一緒だった仲間が、郷里に帰って、家の仕事を継いで醸造しているのを、送ってくれたんでしてね。おれの造った酒だから、メエの墓にかけてやってくれって、手紙で言って来たんで」

瓶のあとから、猪口まで出した。

「ちゃんと、揃ってる」

墓地を出てから、鶴岡八幡の境内に在る近代美術館に、ふたりは入った。

「画は、僕、わからないんです」

と、津川はあけすけに言った。

螢光燈の光をあててフランス名画展が催されていたのだが、それをざっと見て通り抜けるだけで、彼が妙子を案内したのは、展覧会場と同じ二階の一隅に、壁で隔離されている喫茶室であっ

た。とにかく、そこが明るくて鎌倉でも一番感じのよい場所だと津川は紹介した。

連れられて行って見て、妙子も美しい場所だと認めた。コルビュジエ式の建築様式の、箱のように壁で大きく面を取った間から、真下に八幡宮の池の全部と、樹木が美しくかぶさって繁った近くの山を眺めて、卓を囲むのである。池は、こまかく厚い浮き草に一面に蔽われていて、水があるとは見えず、ひろい緑の芝生を見るような気持であった。地面と同じに歩けそうに思えるのだが、ところどころに小さく残る隙間に、青空の色を映した水が光っている。

「入場料を払っても、ここまで入って見る値打はありましょう、画なんか見なくともいいんです」

津川が、こう言ったのに笑いかけて、妙子は隣りのテーブルで展覧会のプログラムを見ながら休んでいた男が目を上げて、こちらを見たのに気がついた。土地の者ではなく、東京から、わざわざ画を見に来たらしい中年の画家か芸術関係の仕事をしているひとのようであった。

「椿が咲いてますのね」

と、妙子は話をそらした。

椿は池の中島の繁みの中に咲いていた。紅い花のほかに、光を受けた葉が一枚ずつ光り、日陰になっている部分は黒い色に見える。

「椿の花ぐらいなら僕も知ってる」

「こんなところが、鎌倉に出来たの、私、知りませんでしたわ」

「やっと、すこしばかり近代化されたんです」

と、津川は言った。

「古い寺だの、誰れの屋敷の址だなんて、古いものばかりが幅をきかせてた」
市街は、池の向うの樹立に隠されて、人家の屋根の一部や火見台を見せているだけである。場所が二階に在るせいで、空がひろく見え、午後の光がよどんでいる。その空から、町の物音が、伝わって来るが、毎日を生活している東京の騒音を思うと、やはり別世界であった。春の光は、津川が動かした紅茶の匙を眩しく光らした。
テーブルをかこんで向い合っていて、妙子は一時間前にはこの津川という男を知らなかったのだと考えた。会社づとめをしているし、若い男との接触は珍らしくない。別に津川は特別の男性と考える理由もないのだった。ただ思いがけず、従兄の友達だった人間と出会って、こうして一緒にお茶をのんでいるというのも、生きている証拠には違いなかった。妙子は、冬の落葉のままになっている地面の下のものになった若い従兄のことを考えていた。
「明さんが戦死なさったの、今の私の年でしたわ」
言葉の下から、ひやりとした影が走ったように思った。妙子が見て津川の顔面は無感動であった。
「うん」
と頷いただけで、
「メエから聞いたんですよ。メエのオヤジさんは、メエが金を貰いに行くと、返すまで利子を取ったんですってね」
これは、返事の出来ない話であった。
「メエが、よく、こぼしてた」

津川は、相変らず平気な顔つきで、こう附け加えて話した。
「証文まで取ったかどうかは知らないけれど、とにかく利子を取られるので、やりきれないって」
「そんなこと、あったでしょうか？　親が自分の子から……」
「きちんと計算して取ったんだって」
「だって、お父さまのお金は、明さんのものですわ。学費だって、お父さまから頂いていたわけですし……」
「ところが、この学費も何も一学期分ずつ、先に渡してくれたんだって。これは、ありがたいんだけど、メエでなくても誰れだって期限より早く使って了う」
津川は、たくましい顔をゆるめて急に笑い出した。
「僕らも悪かった。メエも予科時分から酒をやったけど、金を持っている間、奴さん気が大きくて、よく僕らを連れて飲んで歩いた」
「……」
「だから、学期が終るまで金が残っている筈がないから、メエが何かもっともらしい理由をつけて、オヤジさんのところへ引出しに行く。出してくれるのはよいが、トタンに利子がつくんだって、メエの奴、くさってましたよ。それで、次の学期が来て学費を貰う時になると、オヤジさんが、これこれの貸分になっているが、この内から幾ら返すかってメエに掛合うんだって。決して負けてなんてくれないのだ。元金に利子をつけて、ちゃんと勘定して付出してある。メエの話では僕らがよく行った銀座の酒場なんかよりオヤジの方が、よっぽど取立てがきびしいんだって

……」

思い出が心を楽しませてくれた。春の日の直射を受けていた津川は、男らしく快活な笑顔になっていた。

「メエが自分でそう話したんだから、たしかだ。一学期間にメエが金を持っていたのは、ひと月ぐらいのものだったでしょうよ。その間は、僕らも何分か、その恩恵に浴している。あとはメエの奴、紅茶も飲めないくらいに貧乏してる」

「……」

「けれど、今の大学生よりは、まだ気楽だったし、のんきだったのは確かだ。とにかくオヤジさんがバックにいる。それに、時には、こっそりオヤジさんのものを何か持出して来て、掛物なんかを麦酒(ビール)とカツレツにして胃袋の中へ入れてしまった。柳里恭(りゅうりきょう)って画家を知ってますか?」

妙子は、首を横に振って見せた。

「僕も画家なんて、古いのも新しいのも知らないけれど、柳里恭だけは、メエが持出して売ってしまって、オヤジが探しているし、どうもロケンしそうだと言うので、あわてて皆で金を集めて買い戻しに行ったので、名前を覚えている」

話すのがうれしそうであった。

「売った先が、よそへ売ってしまってたんです」

「……」

「そこへ追いかけて行ったらどこかの会社の重役とかで、自動車小屋もあるヤケに大きな家で、気に入って買ったものだし金を貰っても返せないって、なんて頼んでもきいてくれないのだ。学

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com